

HIGO プログラム選抜試験

2016. 8. 9

HIGO program selective examination for Kumamoto University

小論文（日本語版）

試験時間 1時間30分

(15:00 ~ 16:30)

Short Article

Duration of examination 90 min

(15:00 ~ 16:30)

注意事項 Attention

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子は開かないこと。
Do not open this booklet without the examiner's permission.
2. 問題用紙、解答用紙に乱丁等がないか確認すること。
Please check to ensure all pages are present in the correct order.
3. 試験問題は2題あります。どちらか1題を選択し解答すること。
Select either question to be answered among the questions **I**, and **II**.
4. 解答用紙をとじているホッチキスは、はずさないこと。
Do not remove the staple from the answer sheets.

I 以下の文章を読んで後の問に答えなさい。

「文明」はそのヨーロッパ語の形が示すように、「都市化」、「人為化」を意味する概念である。ここで「都市化」や「人為」に対立させられているのは「自然」にほかならない。「自然」は、そのままで不経済、非能率であるから、人間が介入して、不経済や非能率を改善すること、これが「文明」という概念の最も中心になる発想であった。それは医療にも、あるいは人間社会にさえ及ぶ、新しい発想なのであった。医療にこの思想が及べば、「自然治癒力」への信頼の後退が起こる。自然などに任せておくのではなく、人間が積極的に、病気を克服する手段を講じなければならない。現代医学の背後にも色濃く認められるこのような認識は、一方では外科学の重視という形で現われてくる。かつては床屋職人であった外科医が、十九世紀になると、医学部の枢軸に位置を占めるようになってくるのは、決して偶然ではない。観血的な侵襲を恐れずに、積極的に患部を切除したり、機能を喪った臓器の代替を、人為的に試みたりするような医療のあり方は、こうした状況の結果とみることができる。

もう一方では、クロード・ベルナルに端を発する実験生理学のような、人為によって正確にコントロールされた組織的な方法を用いて、生体の働きを徹底的に明らかにし、あるいは病気の正体も剔抉しようとする学問の誕生と展開も、十九世紀半ば以降のことであった。そこには、人体を対象にした、積極的な人為の介入のもう一つの姿が見られる。このような生理学と病理学の展開の中で、人間は、あるいは人体は、実験という人為的行為の対象と化していくことになる。

それは個人という人間にとどまらなかった。人間集団としての社会もまた、同じように、そうした方法の対象になることになる。統計学的手法が十八世紀に次第にはっきりした形を見せはじめ、人間集団の中での「自然」法則の把握という命題が、それによって自覚的に生まれてくると、それを使って、人間集団の「生理」を実験的に明らかにし、かつそれによってその対象の中に潜む不経済性や非能率性を改善し、改良しようとする意図もまた、十九世紀に入ると明確になった。コントが「社会学」という言葉を思いつく以前に、自分の目指そうとする学問を「社会的生理学」と呼んだのは、これまた決して偶然とは思えない。それはまた、いわゆるオーウェニズムに代表されるような、社会改良主義のなかにも忍び込んでいる。

実際そこには奇妙なパラドックスが見られる。例えば、近代統計学の祖と言われるケトレは、犯罪者が貧困層に多いという統計的データを掴んで、ゆえに貧困は犯罪の温床であり、貧困を無くせば犯罪も減るという結論を得る。ここには、通常の意味での社会改良主義の常識的な姿が見られよう。しかしケトレは同時に、犯罪者の再犯率をデータから割り出して、それが非犯罪者を母集団とする場合の犯罪率よりもはるかに高いことに気づく。そこから彼の得る結論は、人間の中には、もともと（自然に）その何パーセントかは犯罪を犯す傾向をもっており、これは「自然」として受け容れなければならない、つまり、それは人間が社会的状況に「改良的」手段を施しても、結局はどうにもなるものではない、というものである。この結論は、先の改良主義的結論と明らかに矛盾する。

しかし、このような矛盾には、一つの抜け道が用意されていた。それは、最も極端に言えば、そうした「自然」を人為の介入によって変えてしまう、言いかえれば、人間のなかの何パーセントかに「自然」に現われる犯罪者層を現実に抹殺してしまうか、子孫を残させないという形で将来には抹殺してしまう、という手段を取ることであった。優生学が世紀の変わり目ころに確立され、そこでは、人種の改良や、「劣悪な」素質を持った人間の抹殺が、まじめに議論されるようになったことを、われわれは忘れるわけにはいかないのである。

こうして十九世紀の西欧の医療は、科学の台頭によって、一方では、人間の個人を実

験や操作の対象とするという、新しい方法を自らの内に招き入れ、もう一方では、社会や人種といったマクロな人間の集団に対して、これも実験と操作の対象とするための、新しい手法や概念を手に入れたことになる。

ドイツ帝国内務省は、一九三一年に、周到に練られた「人間を対象にした研究についての倫理綱領」を公布した。近代国家がその意志として示した、この種の法律的措置の最初の記念すべき例であった。そこには、年少者、重篤な患者などに対する実験の禁止、本人もしくはその法律的代理人の明確な合意の裏づけなしの実験の禁止、など、人間を対象として行われる医学的、科学的研究活動に対する幾重にも講じられた人道的な足かせが盛られている。

そして、その二年後に政権を奪取したナチズムによって、あれだけ膨大かつ徹底した非人道的な人間への実験が行われたことは、たとえようもないほどの皮肉であるが、しかし十九世紀に誕生した科学とそれを支える方法、さらにはその背後にあった「文明」のイデオロギーが、医療の世界を浸食しはじめたときから、つまり「自然」に信頼し、「自然」を至上とする態度が後退して、「自然」の不経済や非能率に満足せず、それを人為によって改善し改良しようとする姿勢が、主流を占めるようになってきたときに、そのような運命は確かに約束されていたとも言えるのである。医療と科学との交点をもたらした医の変質は、このような陰の部分を負っていたのであった。その意味では、医療の世界は、かつてのヒポクラテスの時代の「倫理綱領」とは全く異質の「倫理」を考えなければならない場所に立たされることにもなったのである。

(村上陽一郎『生と死への眼差し』青土社 2001. pp.55-58)

問1. 本文中のアンダーラインでの「全く異質の「倫理」」とはどのような倫理のことを指しているか400字以内で述べなさい。(ただし、ヒポクラテスの倫理綱領とは、古代西欧の医の倫理を述べたもので、医学の専門性、中絶や安楽死の否定、最善を尽くすこと、秘密厳守などが述べられている。)

問2. 医療と科学のあるべき関係について、自分の考えを600字以内で書きなさい。

- Ⅱ 次の新聞報道にも見られるように、いま世界各国で、過激な社会を分断する政治的主張が広がっている。このような論調が強まっている社会的な背景と、今後民主主義体制を維持していくための課題について、自分の考えを述べなさい。(解答用紙2枚以内。)

朝日新聞 2016年7月26日記事(分断世界)「自国が第一」、各国に拡散

「一票」による市民の反乱が、各国で起きている。

「米国民は再び、一番になる」。21日、オハイオ州クリーブランドの共和党全国大会。大統領候補に指名されたドナルド・トランプ氏は雄弁だった。

会場近くの広場では、トランプ支持者と反対派がにらみ合いを続けていた。約800キロを運転してきた食料品店従業員のニック・ホールマークさん(20)は言った。「昔は工場で働いて一戸建てと車2台を買えた。今は移民が仕事を奪っている。怒りの代弁者がトランプ氏だ」

羽織る布には、トランプ氏の決まり文句があった。

「米国を再び偉大に」

同様の言葉が、別の大陸でも広がる。オーストリアの首都ウィーン。5月下旬の選挙で右翼・自由党の候補が大統領の座にあと0.7ポイントまで迫り、憲法裁判所は再選挙を命じた。

支持者の一人、レオ・コルバウアーさん(29)は自由党のスローガン、「オーストリア・ファースト」を強調する。「自由党をナチスと同一視するメディアもあるけれど、外国人より自国民を優先するのは当たり前です」

自国民を優先しろ。我が国が一番。それは、欧州連合(EU)からの離脱を国民投票で決めた英国でもよく聞かれた言葉だ。

小雨が路面をぬらすロンドン西部イーリングで投票当日、「離脱」と大きく書かれた建物を訪ねた。運動を支えたデビッド・ウィルキンソンさん(52)は、徹夜明けの顔で現れた。「市民は日々、EUが起こす災難を見ている。怒っているのは、普通の人たちだ」

ボリス・ジョンソン前ロンドン市長ら離脱派の合言葉は「主権を取り戻せ」。凶らずも、安倍晋三首相のかつてのスローガン「日本を、取り戻す」と似通った響きを持っていた。

気づけば今、世界で同じような言葉が叫ばれている。それに向かって人々が投じる一票が、国際社会すら震わせている。(ニューヨーク支局長・真鍋弘樹)

(分断世界) 怒り利用、現状打破 民意、ネットで増幅

外国、移民、エリート、既存政治家。誰にでも分かりやすい「敵」を指し示し、「国を取り戻す」。

そんな「敵を指さず言葉」は強い力を持つ。まるで劇薬だ。

欧州連合(EU)離脱を巡る英国の国民投票では、EUが「敵」となった。国論を二分する争いの中、EU残留派のジョー・コックス下院議員が殺害された。

国民投票前日、ロンドンのトラファルガー広場。コックス議員の追悼集会に参加したシンクタンク研究員のステファノ・フェラ氏は、「敵」が求められる理由をこう語った。

「格差や生活難の原因は簡単には説明できない。でも人々は単純な答えを知りたがる。白か黒、敵をはっきりさせる言葉を選ぶ」

5月下旬、メキシコ国境の街、米カリフォルニア州サンディエゴ市では市民数百人が罵倒し合った。

ドナルド・トランプ氏の支持者と反対派だ。警察が隔てる一方は白人、もう一方は非白人ばかり。「国境に壁を建てろ」というトランプ氏の言葉が、人種間に壁を作っていた。トランプ氏への抗議活動を企画した弁護士のアナ・ハイセルさん(41)は嘆いた。

「トランプ氏が移民を攻撃するのは、貧困のふちにいる中流の怒りを利用するためです。」

怒っている人が聞きたがる言葉を語っている」

「敵を指さす」のは、右派だけではない。英国でEU離脱が決まった日、スペインの左派新党「ポデモス」が開いた選挙集会には支持者ら1万人以上が集まった。「今の政治家たちは腐敗しきっている」。集会は5時間以上に及び、午前0時近くにパブロ・イグレシアス書記長が登場した。ポデモスは「怒れる者たち」という市民運動から発し、数年で第3党に急伸した。

「スペインの中流層は、もう消えた」。経営するリフォーム会社が倒産したマリア・ホセペコさん（57）は集会後に熱く語った。「今の政治家は私利私欲ばかりの特権階級になった。庶民はみな猛烈に怒っている」

今回の取材で訪れた国々で繰り返し聞いたのは「ステータス・クオ（現状）の打破」という言葉だ。

「今あるものを壊すこと自体が目的の投票が広がっている」。スペインのジャーナリストの言葉が、現状を言い当てていた。

*

各国で同時進行する民意の反乱には、燃え広がる「速さ」に共通点がある。

米大統領選で急速に支持を広げた「社会主義者」バーニー・サンダース氏には「ネット部隊」がいた。

その一人、デジタルマーケティングが本職のチャールズ・レンチナーさん（47）とニューヨークで会った。

源流は5年前。巨大な格差に怒る人々が金融の中心・ウォール街で抗議の声を上げたオキュパイ（占拠）運動だった。その怒りを票につなげられなかったことを悔いていた。

仲間とサイトを立ち上げた。人々の思いをフェイスブックやツイッターなどのSNSで増幅し、ボランティアを募る。運動はすぐに彼らの手を離れ、若い世代に爆発的に広がった。

手法は世界に広がる。

日本にもつながった。

2月、大統領選で全米最初の党员集会が開かれたアイオワ州に、現地のすし店で働く山本雅昭さん（27）がいた。「サンダースの選挙運動は、常に市民に囲まれていた。『そうか、私たちも状況を変えられるんだ』と思った」

2カ月後に帰国した山本さんは、学生団体「SEALDS（シールズ）」のメンバーとして、まず北海道5区衆院補選で野党統一候補になった池田真紀氏の選挙運動にかかわった。

池田氏を支持した石狩市議の神代（くましる）知花子さん（38）は「私たちの選挙が家内制手工業だとしたら、彼らはベンチャー企業だった。スピード感がまるで違う」と驚きを振り返る。会議で出たばかりのアイデアを「LINE」で共有し、瞬時に候補者の動画やメッセージを全国に拡散させる。

今回の参院選で、山本さんは東京選挙区の民進党・小川敏夫氏の陣営に加わった。SNSでボランティア電話部隊を指揮。街頭演説も絵になるようコーディネートし、ネットに流した。「サンダース氏の手法を使って、一票に近づける増幅装置の役割を果たせたのでは」と山本さんは言う。

「一度経験すれば次からは簡単だ。次のチャンスには、すぐに態勢ができあがる」。そうニューヨークのレンチナーさんは言った。

「格差をなくせ」と主張する左派でも、「我が国第一」を唱える右派でも、それは変わらない。

民意は、次に火が燃え上がる瞬間を待っている。

■問われる代議制民主主義

「勝手に決めるな」

東京の国会議事堂前で、10代の若者たちがコールしているのを聞いた。主張や背景は全く違って、多くの国の有権者が今、そう叫んでいるようだ。世界の政治家たちが同じ

言葉を叫んでいるように。

なぜ先進各国で、人々は既存の政治にノーを突きつけ始めたのか。

冷戦崩壊後、途上国の貧困層と各国の富裕層は大きく所得を伸ばした。その一方で、先進国の中間層の伸びは極めて小さい。グローバル化による負の影響を最も強く感じているのが、この層だ。各国経済を担い、政治の安定を支えていた人々がやせ細り続けている。

この難問に、今ある政治は解決策を示せていない。「政治は限りない利害調整であり、政権を取ると歯切れは悪くなる。一方で劇的に変えて欲しいという民意は強まり、既成政治家は見放される」。政権交代を経験した長妻昭・民進党代表代行はそう語る。

支持を集めるのは「敵を指さず強いリーダー」だ。

「人々の不満を吸い上げ、今の政治は間違いで正しいのはあなただと断言する。この手法は世界各国、右派も左派も変わらない」と言うのは、ポデモスが生まれた舞台であるマドリッド・コンプルテンセ大学のホルヘ・ビルチェス教授だ。

民意の反乱は、分断を強めて現状を破壊するだけなのか。それとも変革の引き金となるのか。

「各国で起きているのは、従来と違う回路で民意を実現しようと殴り込みをかける動きだ。その異議申し立てを受け、代議制民主主義が自己変革できるかどうかが鍵となる」と吉田徹・北海道大教授は説く。

日本でも同じことが起きる条件はそろっているように見える。「先進国に共通する分母は確かにある。民意は、誰かに名付けられるのを待っているのだろう」

過激な言葉でEU離脱を扇動した英国独立党（UKIP）のナイジェル・ファラージ党首は国民投票の夜に言った。「（反EUの民意という）魔人はランプから出てきた。元には戻らない」

投票という手によって、魔法のランプから飛び出し、これまでの枠組みをたたき壊す。神にも悪魔にもなりうる、そんな「魔人」が世界をさまよっている。

（ニューヨーク支局長・真鍋弘樹）